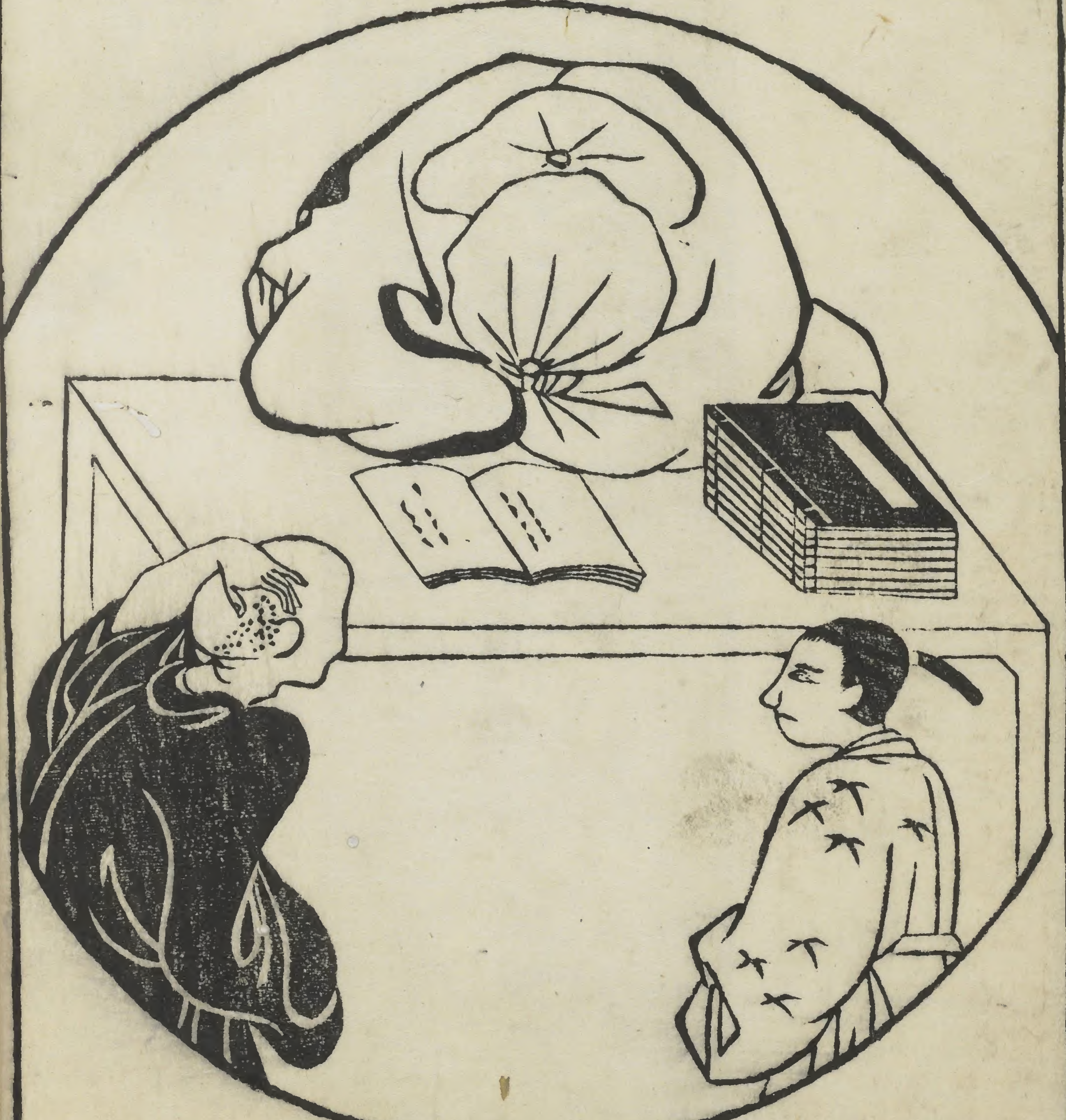
俳諧古今抄 一

復本
932
鷗外

三顛圖



俳諧古今抄巻之上

惣序

蓮二房

今いふ俳諧ハ古に滑稽といへり漢土の司馬遷が史記に滑稽傳を立て三子を記し孔門の六藝に名をならへて諷諫の一道となし又東坡の詩名をも名と称して滑稽は多能俳諧のことしとそ千疑一決の説文あるより儒佛老荘のちまたに分れて談笑と家の秘法とハあやまりぬれと残るにやはたしていふへし又世の人の虚実をそのいはれも詩歌

とせし用とともに今の世も貞享式までは法としこたね
ことさらにまたとなりて文字言語の合ひせに随ふもの也

○俳諧に諷諫の道ある事

天地ありてはじめて陰天地あり地天あり　こゝに道
よりわかれて男と人なることなりさらにと人倫
の私よりなる三綱のまよひありて善となし悪となし
悪としあるは釈迦と悟しまたこて来世を
あるは孔子は実としまたて現在といふもの也

それは花鳥墨の風流を以てまた遊芸口術の
みちくまうて士農工商の家業とせしは詩歌連俳
の風雅にあそふもと人倫の世にとくもりかれら
中にも俳諧の一事は漢史に滑稽の名へはありて
周秦の世むかしもこちろておなれも難悟のね
これらきくまるさて今もまてに周よりこゝの全盛は
なあって法ありしとはくまれや○今操する俳諧の
道は老荘の高逸とおそれてより儒仏の三歴實
とやらけて諷諫とせてなくあし　諷咲とそ
法しなりて世に今日の用をせてあるにまたいふ

Accus. u. Verkürz.

名をめぐらされけるまでも仏神なれば万代一現
の儒仏の書にも名月と神学のさたもさらにさらに
去らくは古松のことまうしも公式の中に一名さへなくて
只此句白をあくつまりやおもきへい
　　きくさてるあつまき独など。露葎
　　なかし　まくられくなどと霄此月の客
是らや此功の作句とらいて去りて秋々の名月に
あきらは不ことさく古梅の此字なれば不まうしと
此名も有ればの立し近く作句と召文つきて也
伝作し揚来たるは達て和事　万宗寵の出されたるしある

中まる名月の海とはそもそれは取様もみの月
不用よしてニ三子是に此れんと考えよ
東巷云此二章を湖南の遺稿にあつて前を
未だ他の唐辛ま色をへ秋の名月名丹と称し
後の三も其此名月と貢関を異とされ
誹諧の辛て如何やあるを此所に亦まうしの
附候を滅ねて再撰の大てありて我意の雑言
の海て後なるし古我心とあれは我門の武用
又ともまうし此名を立へくてなまうしの名とも
立へしとまた作て功子の名月此も代此世ま

Kat. ohne
Verkürzg (Unsin!)

とられて千太の寛を似ありより字を合せ多読
にはふかとあげおていくほく世名ねと仏仲よ
はくめんしや今もと再撰の坊くのほかして初を
一家の判断とおの人は哉字まく二字の名とよぶき
耶字まく四字の名を捨てまお月並の部とす
かおはむね多名といひとれしかむしと六派の
八十餘くいひ紹巴の五百ケ條とやらん仰僅此
百千万億まく無き一字くよかはしまで字を合せ
合ねよ須ふつきとまで彼は句集の読曲訓
にありのの座語まれはおもれても御のおもふき

は此式月の坊城あらんが作をされし行の撰詞
は一言一句帝の所令ちらまくこも合の評句とし
句をらんやうくと遺稿の大経として用捨は
御の家様によらんときや
○桐の葉。　新伸しちが坊の内
○桐の葉は　桃のむらむしと古の茶野が前
これは新の一章を田花の腐字と心ひあり
言ひこも宗の富貴とえいやりもう様
あるもをるへはめりまかを切りて桐の葉や○
とつ子へつれてはつ子を桐の葉み茶もちらんそれ

Verkürzt unten

古格の句とあしきしとるやうなれて滅ねて撰集
の山家にとをる事もあるへとありて一しきりあり
師命のまゝにあまねく武陵の遺稿をえらひおき
て今此発句をあけられたきよし不臨盟と除よ
望まくし西施か容色にあきたらすつかしは再撰
の志は此魔抹して故翁の発句に罪なからし
めんと悔して男子謙と寂ふてまさかそや
大廻
章婦の拾ふともかり勝そそ。
りまとあへそ此人を知ける。
されは此二章の例の湖南此貴遺稿をはりて章婦

の二章を我門の秘訣と伝へて句集の九の侍ま
も世の節操此の三体しあまとり秘する所は此発句
の勝劣。へして其調と勝かふし清濁されはむ
ま議経の雑ありあまりて拾ふも拾は勝そ
而白からふらしんと道をへ下作の神は多講そ
意と大まりつゝしかふてや五をとく推意
の作法なり次より其の一章も此未備なる
備作まて此句も例のんと道てとれ例しき
と清くて其句の難は新たれかく章されは
例しきる故よ何くとして下作よりんと

俳諧古今抄 二

本 複
932
鷗外

Gänsefuss!!

ヌ Kolon(:)

Kolon(:) 也(何)下字語

それに各用ゆるゝ或ハ上を濁り下を濁り或ハ上下
字よみを呼されてこそ押し抱しと云ふなれハ此二字よりハ
同所異用にして以て勝り分かちたるうへハ
押字　何の木花とハしらねども匂ひ哉。
抱字　夕日や秋もいろ〳〵の全き哉。
上を押ス　下を抱ス
此れハ前輩を作者此神ハ集に入り今人の歌
を作りて宗鑑の様とあらはせりしかハ何の木
の花とハをかへて書るにても匂ひ哉と下を留
へなれと也。此ハ書とこそ龍路の像ある也此集
いそぐ句の字とも見へし後輩を勘のゆゑ様所也

さるを夕日や秋もといふ時ハ夕日の色を勘の字也
されバ秋の暮にかぎらず色を勘のかなしさより
やさしきもの夕日ばかりなれバ全くおなじものや
とけや。とハ疑の耶と見るべし此より運悉の浮句
も此呂合の世とや哉しとせむ物を押字抱字も
論すなれとも疑の耶なれバ此他と見るべし論用ハ
秋も。と句を切りて下まではとまで○仮様
にこれらの合同と句読切として又ハまたや
なより読所の習もし夕日や秋も。と読まり
てこれは秘事とはぐへもなきいれハ秘密の取月

ことふ句をしるまさる人と。私用のことなく出まる
哥はら傾く。似かよひて感情催嘆の作者
まれとも素堂服部土芳をうれしもそへら頃
の貞享会よりたうえに點して識ニルカさるんや此頃世名
ゆめてさりし云ぬの名は過書なりんより世名ゆ
く罪なりんよりおかしそを云ぬの名とはかりて
世名ゆよかへしとなりん誹よおのへ云ならし世名
ともつらよそる天地の始まりて名のきつする
みさん言語よりとも名目しなりん云々へ彼
春秋の三部も云ぬの名は暖夏なりんより

世名ゆと惣名して心ゆの名とあそくい
和歌連哥は高よとあるたくて俳諧は通
の名目ともいひもとそふに滅ぬの次は誹
て再撰の大條して云ゐきを伝へしせ名と
んゆよ卿の御沙汰もあるへきとや例の事ひ
てさりかへきや
咲みさを桃の中より和尚了
世名ゆは消より花吹かれて猶の味
名月のさうとゑて稀なる
一ふみこゑ秋よきて盛衰まり

右二章ともに紀行にありておもに駅路の事なと
あれハ三段にして論あり　後に訳す　名所の
類にして論をなす　二子ゆきに似たれともこれらを
二段ゆくとやいふべき　此れハ紀行とあれハ枝つき坂
あらハ枝を随ふて出来るを越べきかと直に
一段の詞を返して事を要する成にも旅事なと
直に二段の心を述べきなりけれ。当用ハ
おとの句ゆる詞にて一段の心をまて[illegible]
此二章を比してゆかまとそ不一[illegible]
こもろと俳とふ時あるべし

Undat— Sich.— Im— 付言句 付句 西語不許

句読切　是れもまた俳諧の中にして深かり
あらハ略あめ。[illegible]
右三章ハ天和の頃此作やしたれらハ附の中節
あれハ花てきこのしまりきて手と起▲三段まる
に句読の事本式のその中や猶の意
も既頃の月とやむ時とハいて[illegible]
よ味わてそへられハ中ゆを例の[illegible]
て句読を今此物[illegible]
三段を附し[illegible]の指なりつ惣別の三段[illegible]
紡れやされハ[illegible]家説[illegible]

近善格　秋風に折れてかなしき桑の杖
嵩帰よりあられど。墓の蓮竹
此ほ句は近善の発句にして。おなじく松倉嵐蘭
が武門に志をとりそこなひすとかなし。後ハ
風月に居在の誘ひにも家を失へることあれとも
其るをいふ所は此ふ後に格の一字をかゝることは
二字の加減一やう。もあられやうに数奇の哉　や
と用ゆれは近善を指とよみして季語の
ましに資されたることを俳諧の実あれハこれ此
白格を證ましてゆゑの有所を論すへきなれ

ともに嵩帰ハ溫帰とも訓して詩には思郷の名あれ
とおもひ帰る。任むと此訣對と見るへし
即興躰　象潟ハむかしの雨にて七言詩
むかしきけ秩父殿さへすまふとり　翁
此ほ句は二義の誹諧にして古の翁句の論ありて
おなしうのもあなれとも七字の草擬をおかしく
後者は殿の字に感嘆を籠めてと語
の滑稽と知へし。さらに近善格とハ即興
躰にかくされの名目なりといはれて
あれはとさらに俳諧は言語のあそひなりといふて

Alliteration

世俗とあつかふこれ式にて實格の妻ともいふべき也
稱中に法にしてはきはめて親族ナリ
盈同躰 はなさとし作法の口葉に
右二章と盈同躰とて祖格なれハし猿蓑の
選者にかゝれる物語の面影にて名ぬる入集
まさうしやし此類の句をかゝる辨ある道路
の夜話にこれ作しは長なり是へ作様の器合
は盈同の形容しからずまやはしもて着手北
治后と消ちにおもて蓋川に色種とはくし

めて次第とさはる稱にて其序をかけ枝とよぶも
とうりに今北二章をかれこれにし例のそと
りて此句をみれとせちらてちうてこれを名首
いま定を三後の新衛にたらふ漢家の法格
にあらしやうん例の見様を寄もんちいふるも
畳字格 春のなれ春へゝくも 如盛ハ花さかり
色を見よ忘れ森を土細來の山
右二章と畳字格とて和漢に此名の例あり
て詩の第北一躰と為べきし畳に限ハみな此
のよくほしよるるおやまされば五字ハ七にと

此稿は祖翁と先師の家撰なれは天和の比此
草稿より元禄の遺稿まて新撰の
遺稿は例は先師の大任なれは伊字ともといふ
すなはち記をもといふ拙なりける新古の石
といへるまて美玉の價をまつ人のことく一句一言の
反故とてしも能くとるといふ拙なりき今こゝに
二章此所法よつてたちて家に我翁の再思を
継をられしや家に我師の無念と悔まれしや
これ先師資の主地とこそ我も御初心様の
諍ひありて例に二軍宗の二軍家なりんとよ然叱事

の嘆口をはつけて二章此優劣を議すへきよ
あらねは二派の家諺をいとひくはなれて一世の
家議も捨かたるへく直世の同堂とまいらへきは
なき

○二系のうふ此事

むかしより和歌連哥にかなといふ詞の優劣あれは
各もいふ語くに用ひ来れとも例の和訓の故とあらす
さらに何なるといふ人もなし○今按するに漢字お
字書にも哉字を多用ひて疑辭とし称歎と
の二用とされは倭にてかと訓まへし與を

Gramatik

好哂々

是ゝ哉

きく哉

是ゝ哉

是ゝ哉

物(モノ)も同(モク)じ此音を云ひならはせし智恵なりし　江南
にも知られざりしを廣き世にあらはさんとおもふを
見ひとしき言葉なるべし　只此まゝにてよし
これは筆の先やく此名歌を考へて大和
真名仮名の一躰と云へし　漢文の躰とはいへれ　此句
浮哉と云ふ時は古格の事なり　此哉。ゝ哉の本
あらんものとも思はぬ哉とのみ　是れも云ひて納まる
の文句にあるは　此後哉といふ一字をはなれる　切字
の向きありて上へ会ひとせとも下へ詞と叶はせる
まで唯さうばかり　みなへつらふをも云ふつる。哉

みなく。哉の事はりんを出して見むべき也はれまい　此哉は
和歌此傳言葉なれは俳諧にはあらずして　是れは部に
世界の詞にいひなれしを一段の心をおきしことにさ
東花云。例の表にいへる浮哉の事は合同の文政
といふはあらず　此世界の餝と云ふ趣(テ)人而不倦(フ)
といふ　此名の親切なるべんや　今云ふは扇信
俳諧に此たぐひ世界此所分有あり

舊遊々船の小節をひきそれて
浮しれ山の月を　是ゝ哉。

これは此句の用を深く知りなばかならずしも古語を

かなり手にを遣は
ならぬ
見るべし
何様の

ほとし和哥の艶詞とかゝり付これを所々の
鏡としいふもよの作れ俳諧の詞とへ天上てきはしは
本據なりいはんや今の俳書道てふ詞は万葉
式の歌なりとかやあしてこの哉とも和哥の
指字也これを起情の縁とし俳なりて古人の名
郷音とは字へかゝるやむとし格調の在様は爰に
風此句を作し新き作る哉
とはる句ともあり集其說論と例のは都と離し
これとさとへるの哉ちるの都とし此字にて余情
とかれくれは浅生の法とてこそ也　仙子

俳諧の
用を
きらふ
なり

此あまり理もれ又類し云々はまわりし　△材料になる
又此哉とをいふ哉とそて為をきて是を都と云
流て節を此行て漢字の詞書ならいふ字を
ました軽く是れを仮名にて書ける哉立
といへ都とは遣様の雨ある也
是を連俳の形式と色々の合同ある和漢
の通用あるをもて公書の故文をも用ひかくし
或は古式の合同は類哉ならつあれと漢文を
は法としてなる此字なり　去つて大和の合同と知るべし
手字の郷類としてきこゝや古今これ色々の合同

あれとはさま〳〵に分て稱歎の哉字となしたらん
例の多岐にしては論ふへくもなき

○之呂のやの字の事

古めかしや。の字也ていふも七字より八字の名目あれと
例の和漢にて通用をいひて之呂にてたらんさらは
疑耶と稱歎哉とに合せとせて之名をもきはめし
古おまく俳にも稱歎の二ツをとりわけてそれ〳〵和漢
の論あるまじきをあやまてり　第一に疑耶とは和漢に
やの字也正字あれは一周して證行あり　第二に

稱歎哉とすふたつを漢字の字にて書まはし多用すへして
彼にも一名ニて云ひかれたるには和訓の二用なく
もさくや。とをも稱美しておもむろや。とを歎息
あらはれ〳〵　俳諧の徽中を立えし　第三に呼合也
といふも漢文の隠ねにして歟道也とは庶法也とし
韻會の云る言之間なるへんされは漢文の回也曲也
のことくは稱歎の字でをも用ゆる時もあらんきられ
也字をも句拾のしまて切字にある時はあれと
ましめや。秋風や。のすれとも句形によらしかるくも
留へしゆして名耶也に哉耶とよろしを論あるに

古式の常法也○ハり捨たるに歟と手也二字を
ハらふや。の字此類ならて殊にさらく手ハ輕し
傳文ゟねのく手と用ひて清かゝ疑の詞あり
濁れハ反してらて辞ならぬゝると歌書のようにくもて
反てを辞とハ清むしやん何なるや例のこゝろ反へと
さつきて云に助字の用へと論さハ清ミて疑ふもと
論して及ひても濁りハ例の把字として此こと〳〵と
まりてへてなり○捅捨らるに古式の文字領哉て云
てまぎらハて和家の名義とあさハ領手さもいふ
ハき〳〵や傳記にあれハ。しと清てあれハ。かし濁りて

あの字も。し此字も大和の助語なり真名よハ手部
と濁り手止と清みて二詞ともに領ひのことなれハ
て截字さへかのてその字なとなむ清れとこれらの
かり捨を古式の名目とあるさしれハ一世の密儀と
家ふへく百世の明鑑ともいへきなり○捨さる
て助語の中にも三世の。し此字ハ略なるてさるを連続
の両字ともに現在未来を切字として過去ハ切字
にあらぬもとや。されハ多く此口傳ありて是ハそ。
かも昨むかハ。欲すハ。いて過去と切字となし。それ
とこゝかく。とも。さらで過去とを切字ともさなくて古より

へかくいはひおきて例ハ非の二字也不是とあらためおこ
とハ俳の切字とて立てられハこそ。此頃よりハ
俳の差別なくて用ゐられし今や和歌の通用とそ
ひとつに和歌の常用と称すへし。彼ハ今ハ非ず過去
の二字を見るへし。定めてかな。けり。也。是。実見に
口字也和名ハ彼ハふ。イキ。らん。此助語なれハ倫して
切字に用ゐるも未来の嗟かし。欲すし。是ハ真名
にて「不」喰「不」飲とかきて切字より文句の用として
全く助語なれハ切字に用ふへき体あらす。
も置て切字の常用とも哉来（カナケリ）の用字也。ハ皆く

一字の備とあて文句に作らるる故也。されハ
和歌家の常用とハ非あらし過去也切字にして未来
ハ切字にあるとしいはんかたなき一部の差難にして
古式の合用と減するへし。係も古式の常法
と斯四字ハ今や二流の宗派より一世の宗議と
字あらはして和歌家の字義をもくに或ハ用ゐ
或を捨て天理の一統に任せて自ら定めてまた説
へからす。諸よく顧みる所の所法ならすとや
東花云、此一段ハ大切の所法ニして濃士の今は
青龍の差別なしに例えハ本の据置とありて切字

の通韻なれハ本末ともに同じ字の訓にして
ともに小疑の詞なり称てなし歎美の義なり
ありて字も一合二字なりと我これに替の
徴中と信ずべし次に耶と也の二字ともに
古く漢土の音なれど大和にてハやとよむ
て第二の仮名にハ第五の銭とも便利
砂鉢も一字なり次に手と歌の語意より起
の傳写に誤りて也と疑ふべからず俳諧のごとく
也とせず君が代も楠が書きしられたる動
歌の字義ありて耕嗣がくしふとうれたるとし

きよくて儒書に点をする僧の憤愛とおもひ捕へし
君も何の憎さかあらんこれより詞のあやにて
つけそへたる人に須よこれ此耕国を我がまま
議をへきよあらねハ何に耳を任せて
用教を家ねずよきかたん課を尋ぬべしみな動
請する君は人は何の為ぞやこれハ
従へるものと和訓の神秘と云へバ諸越の助音
も大和の助訓も言語不到の名目あらんに
日本の人此日本にありて漢土の助語辞を信
きむやうに恥ても恥べき批判してあらんとや頌よ

長字を優に言なして　和訓に助語をかへられ
これを一句十知の凡例にして八義の訣文は
うたに勘被あらし誠や詞の急緩にまかせ
唯乃と云へ婦を命じて云へてならねは
急ならしてならねは緩ある天理の常哉と愛
まされは俳諧の例の僧坊手詠して貴賤老少
の見聞より士農工商の風俗やすくして下子に至るまで
風雅と云ものは本の同様を知ることを一つ第

○百韻ハ表八句の事

当時は百韻とさへいへは連歌のうしに中古より俳諧は
そうしやうを上句と下句と此と移とうつり合せけれは
俳諧と連歌とて俳諧とし云るせん濃生の聯句
なうしは一義その式を後の法ありとそ定めたれと
連歌は本式といふをはしめとして表十句て名残
の裏を六句として俳諧の礼儀に表八
句を定むけると連歌は古法によつて付しかれ
於て附を古式の規矩として或て稽句より表の両
の或を御とかるへしならむと二折の思ふなれは
たつて後とせられはなんとして連歌の古風より表

八句の内まづ神祇釈教恋無常名所人名など
嫌ふなれバ発句脇第三迄にて一巻の精力をおくらし
あまり其下の八句を句浄まして物行を所々やすらか
にして月花も耳立てぬやうにすべしとおもはれし表と
いひ又称しいふもれど神祇以下ハ名目としいふまでも
なくて一巻の世界と寛くなる所ふふ事也おもて
百韻の表八句といふ端ハ発句を混沌の間より
太極の一気ハ動き出たれし陰陽の沈ハ生ずれ
されバ是れを以て此差別の如くに発句より
妙合の所在あるへし知へし詩経よりと起しいへり

引起を脈とふ也一万物を一にはしまりて相対されバ
二つとなりまた三に混一の字様を作して成つてみると
陰陽の和合といふ一つなり君臣一二三陰陽
の備わるとおもふべし此発句脇の脈の韻字にて発句
脇の言語ひとまはりて調のものならぬをおもふ表
さらに三つ其此前句を作れて何も事附て中すへき
なしあれし韻字ひとへにて例の名目也詩経より
是を定しより或ハ象字とも用一引起を第三
を中にしる万物を生するところ三運事化の
元理より三節一ましく発句の治まる事はなれハ

第四句

第五句
第六句

第七句
第八句

ゆの字でのみか此輕きより本性をかへて次の所句へ
おほよそさんとするを詩格といひそれを轉といふなり古式に
親字の名といひ或は由あると云ふなり和歌にへ
其の所作あらし偏して二句をつゞきてやまへまへて三句を
四句目よりといふは天數を三とさして一句移を以て
地數を二とさして和合として四句目は五句の下
至りて六をも定められ輕きにて其字は下句の所にて
の親疎を論をさして其次の句此所をもさしてかへて
用ゐるを詩格といふと合せてある是れは六句目を
七句目をたての一隊の地とみへて七句目と知るを

月の字を以て新奇をとくるによりて月をもて風雅の
順例あるより八句目を月とも會釈と知るべし此和歌
儀式の能讀をおよそ表とみへて其筋行の
三體も曲節地の三樣も一席の様にもよく考へてある
〈まゝや〇今様きるにも其の次第も傳門御家の
一巻よりはじめなくの句の用より三綱五常も戒
十善も詩法もよき起承の詩格といひ歌書にも
此册序の五義とて一品とも書てある其の制度して
をよる句をも取と論をさしてるなと云ふ句を變通
せるよりて学ひ上手とはいふ事とされや又予は覺を

1 Bogen = 8 Seiten

まこと表は地の用なれは百韻にも一百韻たるへし

○四折并曲節地并事

およそ百韻の懐は一巻を四折八面にして折
ことに表と裏あり面ことに句数の次第と
さりけれは是を折ともいひ面とも構へ
さるに表は四にして面は八あり表と面との二用
と知へし此百韻の部にいふ所第一は四折の変化
にて此曲節地の二用をもってまた変化の
名をあらはし常より今様の誹諧にも地と花と

節を次とし曲を中に地其変あり是を白集に
宗祇の雲ちらしも是れは発句も附合も秘蔵の
訳あるへし趣向と句作の差別ありて趣向を先とし
句作を後にするはよくあることは花の趣をとりて
表にて趣向をして神にも構はて姿と
作は趣味の心趣も詞とに作るもよくと句作の
かよはせていはぬ所にて俳諧を一句くよみ句此
没情を心作にして芸をへいふくの雰もて雅き
発句よりもみえて趣向にて西念の名は深きをほけ
厳もの子とも今までの句を巻にてすてらん言へと句作の

初折　二折　三折

に流をとむるへし義ありて初心ハ長句と定る事
流ありてされども執中流といふはこれにきはまりし
当節世の中和をきらひて句作の風俗よりてその上
異なる所と思ふも三條の一派の更なる人の長句
いま新の長句あつて世に下東語の対句あらんには
例の和易とするにや何をか此俳の道をいへる俳有
の長句を求むる事や頭くひ首をくへき月をもあそひ
てこの俳を見るに今の事あらんにはや初めはあまたの
歌よりも誹諧を東語のすゆへきよらうに
申しならは俳諧の名をとりてのちに大風流の人

にほへるむ〇今様またに折のくそりて初折と
きた地をさくしてからうにも寄言怪語を求めて当句
に附んとまもうものなり一しとまむむしあれと表にも
七句目は月と定めて裏の八句目は月秋とこゝの句
十三句目と花をさされとは初折を月花の儀式
おほくそれと世流のそれ節あらうりてをこを俳諧の地を
いふりまされは二折よりてろそをまた地本意の様お
とくろうて初折の心をおとく一しちよとそ名目の
和といひて世流のうろうそとをもいひも流ていに折よ
いろうていこてと俳諧のあそひ取りて例の本意を

はくもて一はかりし和をもて和をなしこれをもて節を
とゝのふる古人の経とするへうもありて是も節あるけ
はかね人と優游自在の人とてやかて合体の一
折々なりしき韻の尾あれはこれ和也遅速
をもらひて趣向此よしあしは人を感さしてこと
一派の趣としひて世俗の附合を正しとせし也故に
三貴の二なるは句にて峯句なれは貴人と
語られは古句を此流の趣とはつらひてまたも
て所へはきもしまはしひ新句さこれを感をもより
詠句より一派の尾をとりて古人は俳諧に言語

のあまひしてひとすち世俗をまねる人のこゝは一字に見えて
い妻も作の用にして次第をならくのことくしてまりて附折
のくいこにも後あらんてこれに易しくこゝろを寄す
をやまれはしは撰集のうちよりにそ興の筋
あれはかこれは自在の所もあらくてしも例の妻を通すへき方
ありて例の縦横自在たる一ツまても俳家の
五対八教も竹林の奥を窺ひとさわて阿難ひとり
の聴聞より上ころもや儒仏の四書五経も
刪詩正書とさる撰者の腕力を招くし
これをその奥儀にして唯俳の秘授あれは

はれとはよ二京と責楼の発句とするなれ あり
て誹文をおほく作るの句あれはこれをしり句
の例とするなきや△新撰あるは此頃に撰集
の業かは三條源家の百千万首として我家の
五十一代集は撰者をひとり御下りまして乞ま
てかくも鼓舞の役をなして蹴鞠の大役とは
そのうちも此ほどは白馬の談笑訓に国寺名蹴鞠
のあらひはかなうもしへに飛鳥の所作を伝へて
おほし業ありて膽の精義此二三條と
伝へて越家とくやむしまれしからすあるて此

兼抹しや後の人をとこやまふにおもきをしかうそうと
おもはれておもふ人をも滅後ともあらの耳撰あるへし

○月花此事

月花を風雅のかざりとせしは古歌を始め
の花をとらへ八雲に月くの月とあるべく
四花は月を古式の名月なれど冬花の重に付て
せつかく宗祇の此を勅許ありて四花も七月は古式
さてをなにしかれは月と花の前を一年の行事は
中にも節供正月の恒例まゆとて乃しき

けれは百韻を花の本の流にて八月を月秋と
いふへし 然るを月秋と季節をわけては秋季
なりとしても月を八月と見る也 一下の句も有
は撰和する也 中古は百韻の連歌にて八月は
月秋と定れはかならす花の秋季にて故に
季語を七句までに定めし花も新にて一句ありて
秋と秋とにて其定なん季節の配りかたなし
越て見るべし 秋は一句の新旧とて是を
まつ用ゆるは其花の句なれはやすからぬ我家の式
はいかにも花二月としらんかなしとは連歌の式なり

も名残の月は七句 されはと勅免の例にあれは本用
の俳諧にもあるやうに きやうと一座の実儀よりへし
用ゆるを例の自然にて其ものは元禄の百韻に
東花云はらくね為の遺教を請たるに始まる
俳諧に誹諧の俳諧よりきたるの付式といひ
お座もね新旧の定らはあれと書く 白集選訓
まことにもいくたも此撰集あれとも
一季は古代の式用ゆるとせしく 作事
と文して 桃青芙蓉とあとより武家
の古今を評論して以下此実儀を家にまる

と月花の公式よりて花は新味の大端なる
月は一季紙の新親なる故前の儀は十余年
うして世上ニに本用を捨たりん遠く
らとあやまち近く始と露かけ伸化のたよ
へきく抛ちらんけるを我か家の双方をあらし
て風景の威とかりて事をわさんとはせまお
い貴法の称よせられ雁ね是掟者の罪なせ
かふれん人をくいかわりつきいゝ事の裏選式の
角撰なり

○指合去嫌の事

古式は指合去嫌にさふまたしてる月の分落なりを
あとれは指合よりも作法とらに去嫌にてまた
景物のあからんきられ二合二宛まてせかりと式の
脈なりとても分別あるへき也○今様の中に
式目をわけれは御傘を始として連歌は只一と
あり知も俳諧は本意訓よかりて二を三をこしゆるとも
連歌の家の制をあかりと三句去とても嫌きそも
きこれ俳諧の掟にも何ねかくまてき第一也はとく連歌
へ公家の艶詞とせる公家の中の風雅とて一へ
俳諧は下輩の平話とせる下輩の中の風雅とす

てにをはへつゞきたる人ハ作意の本趣を撰ぬるものにあらず
ことばハ文字を書紙の書式によりて雅字を假名
書法合せよりをも知べし たとへハ前句の字数三字
書名としてつれるを書訓の字ならぬによりて雅字
ハ真竹の字形をとるべし 古しより名所人名など
同字別字の古代あるをやこれらを假名にて書鄙を
もゆるし一句さらに隨してつゞきもとし古き書様
の古代より一句秘して書様をもて隨をなし
かゝる拙あり親子隣字あれも字部ハかなにて
用ゆへし 或ハ二句去一字を撰用へきなり 二句

さる拙あり家を嫌ふといふ事もてなすをもて句
より前句七句と嫌ふ物を竹木なとの鉄の名あるより
器財食服の衣類等あり 或は字をかへて書ハ何ても
ゑ句さらに拙のまゝや或ハ折と嫌ふ也 其ハ五韻まで
あるへし 面と裏をへだてゝ拙ハ五韻はなるへし 紙子
又絹紙下地紙二新なる時ハ出減を知べし○作様を
に拵なき言葉ならぬ世にしたがひ今の用あつて歌は好
むかしも作匠なき事をとしゆる詩歌作法の入れ物
とや世に俳諧作法と號して文武の人をも召用ありて
農工商の輩までも人事とあいなりて辞書をして作法しる

の詩抄に詳なれバ爰にハ二三の源流をあげて
其余を例の百に通すべし　されバ俳諧の
式も本より連歌を源とすれバあらく底守
の新式に據ての一書とすべし　今の俳諧と
申ける俳諧に用捨の事あれバとあるをもて
例のごとくもちへまへべき連歌に正式の一書
なれバ也　又人々こゝろに新古と定むべき

一韻字の事　△撰に云　韻字の法ハ俳諧に是を逐
なしんかほして願哉と云ふ句ハ是を用ゐる也

一輪廻の事　△撰に云　俳諧ハ附合の中に寔を第一とす

まことの治定とうけておるもの三四句のを附らねバ一字
一連のよ本説より言て句より外に行くハ和歌とも
附合の輪廻なし　花を同とらハ露とら紙にも世
ろいおもふれバ遠微の詞をも遣されまた
俳諧も同じ文て　目にみて　なれての輪廻ハさぬ
字も也にれて善語に風体あらて大工に治定
けれバ折と詠ても是を通すべし

一本歌の事　△撰に云　俳諧にも本歌よりもの法あれど
今の俳諧にハ捨なれバハゐ事へハ初句の附句
も附句にハ和歌くも前句の哉入なれどおとれきと

其ねらはすりかゝ其句ありて故に古語
のあらはれたることゝ申す也そこ字を
かへしたる文に採摘の常なる也俳諧を
いふ事語のあらはれたるを採摘の意を採ん
とするにあらねども風雅をたもつものなれば
ものはみな今よりしる物にてみなひとに
古語と用ゆれば詩歌をかへしてみれどもいふ

一 雑物雑用の事
俳諧の事語のこと論ずる事也

△撰云これよりの引のあそびの撰
其もし雑しも俳諧と知るにも用ゐるなれと

雑用の説よりふるき家に於ては何よりも雑物とし是れ
は二百より十六よりも十二品をも定めて雑本用
あれはそのかたち例をもちてさて也

一 雑句物の事 △撰云前式にある異風の形也
あるを中古より俳式に入る歎しかるへし音訓と
かはりまた合よりてそれ連歌にて一とてしかれ
と論をれば又名同雑の一二を以て[illegible]
今此俳諧の説も同名合の雑の善悪をみて
云々しかもとしてそれに思はれ[illegible]
思ひいふしかりて牛頭馬頭のかくちか[illegible]

返さぬくも宗祇の勅にも古今と宗祇ハて句なるへし
一 向教す ○撰伝ある連哥を哉付て春秋恋
ハ五句まて二句冬をハ二句まてあるへし 俳諧ハ例の
用捨して二句と三句とて留まるれとも 五句の府
ハ夏と冬とハ初め句よりて二句まて持る也とハ賦句
の作法を入て是れ連哥の艶詞とて例
例のとんけれハ春秋の三句をまて法して二句と
定てるを例は月花の句数あれハ二ふ三句を
夏も人ふ也春夏ハ其秋をハ五句なんして三句なん
二句迄一とま也 同事の春雑ハ句にて五句迄

たへ十七箇條の極むる応安の新式より十七
條の中とさとくりて其意ハ連哥と俳諧
と用捨の心理とまれとも也扨て今や俳諧の野懐
ハ和哥連歌ハ合をあらす亀卜ず 画讃の統
とまるとん為あれハ所して名月の和哥に及ぬ
と法をふく此野あれハ例とゝ路布の簡札と
なる一一諸ま人事此言(コト)をとある不知(ハ)言(ヲ)
不知(ニ)人(ヲ)て其備語一郷の統文として一疵よ
馬牛と笑らひ也 祖父の和海の張り
はらけハ是また俳諧の席なりてもその人柄(カラ)ハ

俳諧古今抄 三

復本 932

鷗外

とらへもありて連誹にもこれを名と称へしが此俳諧
にいたりては新の発句もおほく用ゐられて
四季の部立には世節と云一〇今撰まるに
名所に新の発句あれば一句にても所の名をもし
その風景の情をとりてあるは書季を結ん
とも只姿情にかなへるはなくやうなるもの一つも
雲鶴の例には

あさむつを渡るつし海を片ん

かくて此これとかの浦山の姿情をはくさと
その紀行にも申し侍りければのちに武陵より
伊賀にゆかりし集の芦輪うちかへりて

かちならハ杖つき坂と落馬哉

此時をそれの人此翁のかくれぬ牛もある杖
とするにあらぬ服もありてむかし名所の連歌
にいへるや此獻も侍りけむ名所の雑ハかく
こそとそのまゝこれおなし比の源作にて次て
あしにきくよし侍りて

かくはかり角もかゝりけよ須磨あかし

此句も荘子にいへる蠻觸の両国をおもひよせ
源氏に通ひたる類とはいへる俳諧の調のこと

烏鵲橋 古抄ニ生類ニ非ストハ如何シ鳥ニハ云ヘキナリ

鳩吹 此詞ハ種々ノ説アレト手ヲ吹テ鳩ノ声ニ似タルナリ

紅葉散 此詞ハ古式ヨリ且散(カツチル)ヲ秋トモイヒ散トハカリヲ冬トモ云ニレト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニテ花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ名ナリ増テ冬ニ散ルハ木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ此等ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且ノ字ニハ及向數ナリ

柏散 此柏ハ傍ノ傘ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證文トシコトキ覚ハ新ト成セレモ爰ニ散ノ字ヲ結テハ決メ秋ト定ヘキナリ○今按スルニ論語ノ松柏ハ松(マツ)ト栢(カヤ)ト

常盤木ニヤ然ルヲ六書正譌ニハ栢ノ字ハ柏ノ字ノ俗書ナリトヤ去ルヲ大和ノ俗習ニハ栢ヲカヤト訓シ柏ヲカシハト訓シテ此類ノ正俗ハ數多ナレト知テ誤ニ従フヲ国風ノ故実トハ云ヘリ去ナセヲ爾雅ノ註ニハ榧有美實而知栢トアレハ倭ニモ頻ナハ榧ノ字ヲモ用ユ榧ト栢トハ異字同訓ト云ヘシ或ハ傍ノ傘ノ説ニハ紅葉セ又散ニトモ云ニレト桐ノ葉ハ紅葉セ子氏和漢通用ノ秋季ナリ惣シテ我家ノ真名遣ハ雅字俗字ノ二論ヨリ古今ノ両用モ正譌ノ二様モ作諧ハ例ノ俗習ニ従テ今日ノ用ヲ専スヘキナリ

いさ匠なり　はよあ

字母あるよし天文の北辰北極にあらざれとしるせるを
せくまひハまねて或ハ故實といふ抑ありてしるし。
となどといふことき撥字なとも曲てぬの假名
あるよし庵字中も韻字も音とをされハ訓ハ
ぬの字よやしられども何故よ撥れハぬの字せ名
あるや字書にハしるをとも如是ともしありおあきらか
歌書の相叔寄にて例の不埒なき故實
ことや或ハ口傳といふ抑ありて字を入へきくしと
なふし其のことき法とハ法といひパポハな
より通音にて入声を具てぷの字あれハ

Nonsense

あぷしもあぷしもし出一文字とあぷしそハ物の名
てきぷしたる詞のやうてきなれハさぬら子非ぬらし
ときことき假名の剛柔とある（へきやけにてあるを
うぷの輕重にてきこと口傳とハいふなる（一）にて
假名遣の字意を書法の字形と音韻の輕重
とけ無用にて也されハ余ハ例と考へ知一
但ハ假名の輕重にして輕き白圏と黒
重き黒角を點す二様を平仄の桐紋也○今按
まうれ假名の書法ハ連歌の書にいありて連声
ハ假名からくれ俳諧も眞名からあれハ假名と

真名とも此配ふるを称さるにふぶの名あり一ツ書とい
いあつかさむらか此ことき假名ハむかしより此字を見
とはるもを假名書の雅文をつくるやうにて書法
の字ハ形かくけやかれハあはれおさむよ。と云ふなさや
定らずやすて浮けかりし定まらずい例の
なあるよ似さんこれも此假名ハはしきことまする家
の口授をとし知りきや或ハ文句まへつゐるやうにて
あこしつゐるやふまとハ假てよくし或ハ言語よゆよ。
ことさらへゆようて文を縮てよくし或ハしとおふ。
の信縮よおあしけれハよる字者のよめるふうして

字形のくさりを去一ト定まる所ハ文句と言語と
に同訓異用の假名遣あり（上よ用ひ中よ用ひ
下よ用ゐるなどおありおほむね假名遣のあるべき
いひゐひいゐ）おをゝはえへつちのおそすてふそ
新制のかれなせむとて假名はその法のことくなる
をなれのあるを程ならふおもひそあまりの字文
の勢力なきにこえたるねと恥もしてくのなるね
とあはれをおほしくさむとくも例の衆議より
例の明證にかくさむきまるやこれらハ一致の法
まもてなるものもあるまじきさいはれや

○い　○ひ　○ゐ　○ふむ　○ひゐ　○ふう　○むう

いぎく　鰕鯉類
いぷ一　羹雛類
塩　しほハ塩の財也　或ハしほあつひとも　紅　くれなゐとも又もみとも
住居　すまゐとも　ゐるを正韻とせ
賊　ぞくハ悪の義也　侍　さぶらふとも
ゑ　しひを一音也
所　ところ　とも
肯　うけがふ　いなむとも　これを故実也
東花云古法よつひの説をして　いぎくと
ひぷ　ひぷへの二用あつてきみくハ定めうきく

に通ひそぴをぷにに通ふなり也されども
音韻をひふへを唇の一音に通へとつき
くを唯牙の二音に通ひ或を罪し定めし
とる之歯音の二に通ひて入きしチの標も
究まりもてかキクケの皇をも定まりしを
これらを太和の国曲まで上に此字まを梅し
きの助韻おほしこれハ我邦の音律
此仍ちをきをひ語まるも推写をなれを
和訓にくもきを耻とかふ一△角襟まる
につぴをかくのごとく鯛と叢此書名

とりてハ假名とも文句とも言語とも動く
動かぬ詞ありて物名をも兼て動かぬ
ハ鯛鯉のたぐひの字也其うち葉離の
ねもおなじく物名なれども假名なる
次手あとに又ハありて葉をあふひとも
いきをあげて見れとやうる故にいぱ。
唇音の次手あり離ハ同ひなふの假名
なれともいくも音響の次手あり似ゝふ
次手とて歌書にもよし挪ぱとおこるれや
なめてめを古相に中略とあれし おなじの

あれもおなしやうにかゝる假名に動くと
動かぬとはあるもあなれども言語と動き
文句を動かさぬをもてよしとさるにあらひ。
のこときくも尊なれば例にもあるをも次にいふ。
以下の五品ハ古書の假名遣ひに敵拄され
ハ今後さるまなきらん△獨擬ハ含りれ假名
遣ひとおよそも文句と言語とに或ハ動く
と動かぬと或ハ書るとかゝぬと或ハ
上中下に用るとあるハ輕重と急緩と
或ハ口傳と故実ともあれハ假名遣ひ

のまし意を和歌の撰集にも武家の軍書
も假名と真名とわかちより假名ハ
はくさと木下としてよみるを其書の用
あれいそしぬるも其讀やすきかんゐあり
あるを今此集もありて万葉假名を
かきくわりひらくまきく真名をとれるね
ま一字も二字まてニ通れハあとさきの見種
を去ふ讀て風雅を以声の感ありあれ
いへまさ汕なて潤しこあされまて作を
されど能書の家よせれて系風系子

の風流すあるハ和月ろくハまみねる面白し
諸きよの好むも撰集まえんる一くうまりまき
此花浩る系風まえるつきくなや体まし式
の可崇なる圏角の二紋よ軽重をありし
もれハ千文万字も此所よあまてかまよりみた
せくまてひかきねとも和月くさに多段の
まよひあらんきれハ再撰の要として假名
ハよあれをと用ろう不一發百中の的語をとる也

○不　通とある　雑まるかし

○と　直ちきる　蛇ともやら　此れハ真実也

○れ
○を

東花云此二字を序詞にありて播字を
と令て○の微仮名あるよし仍れしを考ね
ても初の字おほしけるは何とも○いまさひ
のことき今此前ほとのことを考○
をも仍してる此書を放に此四字とりて
○して也仍て定下の五字悉書ゝう中角撰也

男 おとこ 下は おとこ	桶 おけ	大 おほ	尾 お
女 ○をんな 山下は をとこ○	小桶 をけ○	小 を○	緒 を○

東花云此二字は古来深ありて奥の義とせしにの
○をしよ仍るを書るし常をねと此急 緩の

○わ
○は

是又は仍なれと東路に詞のちかひありて
読るは多くあちらこちらも田舎は高ぶよみなれ
て定て上とにそ○通用也

わ ▲ 同し上と下に用ゆ　此れは文句也
は○ 同し中と下に用ゆ　之輪　みなと当し

東花云△角撰をもれ微仮名のんあるこして
わをを上下に用ひ○はを中下に用ゆれ
仍を定る初用をねといへむろまとへはよみ
字は上下に用ゆとて初の字を上下に用ひ
かくし今字もみなとみわのれや○八の字

をゆづれ用ゆとして をの字は中より用ひ
はじめにあられとあられのあれやしあられ
とも書して書けれとも詳かなし称すなし假名
又は或はするまる法るのあれもまた色て
をの字を用ゆへし或はをんぐ[ゆ]ずべしと云ふ
あれはんを中たるを字形なるへし あれ
を書法のくもりなく假名の法くきとも
てふあれはいかを法則よ寄へし法れとも
古法の假名法つひとに庭ゆは法さへ雲はあるはぽ
録くだのれそいなるなとも知りてこれ

○え

○へ

○ゑ

と清して上の字あるん例の字の議によりつきて也
消キエル 枝エ 笛フエ 此用ハ枝ゑゑの字とはこれ
更カフル 机 えゆふへの よりはなし字なりそれと
声コヱ 着スヱルや 業なく和あつ 実也
猪 コスヱ 或は本 末 コスヱ ハ すずとも すゑとも 此の字
東蒼云えの字すをむしより論ありて
とや分ねあつる也中えとも縫えとも衣え
とも上ふや甲えともゆゑるとゆふよありて
二音通ふうるはや縫えとんとえし中えの字形
とひ改えとんとそ字形訓や或は在え
とつふ合あれとりそを清して箇アフ字よあらん

俳諧古今抄

五

複本
932

鷗外

婦とあさ〳〵しくてはよ美を有心に含秋に似を
道場の畳道具としも各の當用ともすま有る壁
も始とすむくしそりけても婦の宝かうては
よ其人に其場の所存とあり天相に叙れの趣向
をけらくそてよる句の用と作るなよそ歌を附方し
いつりまされハ案じ方と附方をもそれとさとく見
案じても事とうて附るなよ去つてくよとる兄居
なあれとも二名一所しきる一ず〳〵也但しよ負おとは
そよ對附もけるよ空撓し古代の大さいはそ
あうし作句を今此新制なれハ此れ代の附合

のそむ时を知らずして實頑の負分よよる也し
自己の石理をそむへうもまとも也

○懐帋よ名目此事

此は連俳の一帋として石を百韻とあの知られと
て十表をとかきねれハ平句とさひ百帋をとかさねれ
ハ一万句としよ十百韻と千句此差すおを一冊とす経
のちらひよて去嫁の用捨あるなや也けて百韻ハ
に折まして初折を表をと八句とよし 其裏を十四
句とし二三の折を表も裏もおなしく十四句と

ありけるに四の折も表十四句まて也裏も
八句とおさむる始と挽の裏ねうして四のひとをと
いふて名残の折とぞ云て五式の類ハ八句
さらにてハまた合て懐紙の八句しとぞ云表
と面のさ嫌ハ頼事此書子をとさんをも此次
ハ七十二候とて百韵を三折ハをわきて三の折
の裏を八句ゆまて去れハ三花気月うてゝを名
ハ七十二気候とかくとれり風中くハ三折や
さらにて奇的の裏ねうして中比の名月あり
表六句ハ裏をさし一句とし三の折此裏を側の

六句まてを名とも源氏の五十帖によれり又五十韵
と云ハ古代よりして百韵の中を減じたると百韵の
折附より初ウ二ヲ二ウにして始りて三ヲ三ウ三ヲ三ウと
次第して名ヲ名ウと移るもとけれハ二折三折の
懐紙よも名ヲ名ウとそ云へさる也　略折の事
ハ此の有略なれハ五十韵とまして七十二候も
三ヲ三ウとも云也　一ヲ二ヲと五十韵の変ねを
て二の折此裏をいるとあさるハ百首の和の時も
とえまるも或ハちくやの或ハとめくして一紙此
その尾を作りきくめやもその名は四十四とよし

これも例の俗習なりて縁起祝言のひとつきとも
いふなり哥仙は各同の風流なりけるを十八番の
歌合より其後人と哥仙とそうろんまじへしが下
の句とあはせて三十六哥仙の名とはなりしなり
月花も二折の式なれば六句十二句とせり然れば
今式にて二花三月のは法あり此式の遺訓に
不合まじ哥仙尾嗜を一座の時宜なり或は年納
の読と祝し或は歳暮歳旦の賀にては始終を
とりなす事もあれば三くは八つならしまして表を嚢は
その尾を合せて月花の二座をも此損ありよしと

なほ上古にも是格ありて或は一折よりやむ時も
あれば然るを公式の論にあらねばもとより此式
をそれも也但いふも長短の二行は枚減後
の新製にして未だ求韵の用なりし短哥に
は時宜の書用あり求韵の下にいふなし

○ 求韵の俳諧に句数の事

実に俳諧の求韵といふは奥儀秘の法を
かりて和哥の韵に数万やそくれども此式は
枚数の外前には法ありて武江の素堂と岩翁

されバ今にて長歌行も全く東花式の新製
なる故第一に換韻の法ありて百韻も五十韻も
一韻十四句にて八字とも用ひハ假名もすくなくして
不自在なりしてせめてとも今のごとく是れを
今此八ことを作るも第二を連歌の名目とせて
「百一列の俳諧あらんに六としも歌仙の古法なれ
と八その人ねさへ六八の長歌に用ある一表ハ
八句にて裏と十六句とし二折にて四十四句
なれハ式目ハさらて五十韻にかへてもよし月花
も例のせる目なれと花ハ但十五句目也

まおれ古法にかゝるすなハ隣に短歌行を長歌
に對するの變ねあり表を四句にて裏と八句
とし二の折此表を八句にて裏と例の四句也
此ね七四六十句にて先を換韻の用なし短
うんとこの時に一列の一折なれより物に始終を
そなへむるためさると我門の歌仙式に二花二月
の有法もあれハ月花の説を見論にて春秋
夏冬の季嫌も之の去此の省略あるへきことや
源俳行といひ歌仙行といひ中より六とせ古法
あれと俳諧に来韻の出るらんとせ長歌の

されば今いふ長歌行も全く東花式の新製
あるが中一に換韵の場ありて百韵も五十韵も
一韵十四句に八字を用ひ假名をすて字よりて
不自在なりしかはてもとゝ令かくまれを
今此八句とも合する也中才二を連衣の名目まで
一百一吼の俳諧ありんぞ六句を一専総の古代それ
と八を[illegible]の人ねきん六八の長歌に用ある一表八
八句まて裏を十六句とし二折にて四十句
なれは式目はきゑて五十韵にかゝりても月花
も例のせる用なれども花屋を但十六句用也

またそれ古代にかゝるすあり次に短歌行を長歌
に對するものなり表を四句にして裏を八句
とし二の折も表を八句にて裏を例の四句也
此ねも四六出字にて先を換韵の用あり経
られしが二の時に二折の一折なりしなり物に始終を
を定むるためとなるを我門の舌旡式に二花一月
の有ければあれは月花の設を論して春秋
夏冬の季據もこゝに立此有略あるへきものや
俳諧行といひ首尾行といひまり六をそれ古代
あれど俳諧に来韵の色あるらん時を長歌の